モンブランが控える。富士山より高い山々に囲まれた特別展望のよい峠だった。

ロータレ峠方面に少し下ったところにギフトショップとツール創生期の立役者、アンリ・デュグランジュの記念碑があった。彼がこの峠をツールのコースに組み込んだところは変速機のない自転車で上ったそうだ。私はインナー×ローでもきつかったのだから、往時の選手はさぞかし大変だったろう。ロータレ峠を西に下り、ラグラーブという村で泊まった。夕食のデザートに出たチーズの盛り合わせは心なしか違った味がした。

Etape4
山の民の祈り

ガリビエ峠の南側は国立公園に指定され、開発が制限されておりアルプスの自然が残るエリアだ。目覚めると、名峰ラ・メイジュが神々しく朝日に輝いていた。宿の山側に小さなチャペルがあった。

●ツールの通過した道路に残された文字。感慨を噛みしめて走る

●ランチはこんなスタイル。毎回、様々なチーズを堪能したものだ

ほんの20m程度だが、上ってみると山の頂きがいっそう美しく見える。このあたりの教会はどこでも、建物の周囲に所狭しと墓が建っている。木造の小さな墓標群は、それぞれがラ・メイジュを向いており、人々の祈りはキリスト像だけでなく山にも捧げられたのだろう。

今日は、ラルプ・デュエズでタイムトライアルの予定だ。

麓の町、ブール・ドワザンまではおおむね下り。見通しの悪いトンネルがあるので前照灯とテールランプは欠かせない。崖っぷちを走ることも多く、下りならではの気安さに、「箱根の山は天下の険～」と、つい口ずさむ。

町の手前の大きな掲示板を右に入ると、サイクリストがどんどん通過していく。0m地点の標識から1人ずつ2分間隔でアタックした。最初の2kmほどは11%と勾配がとくに厳しく、はじめから飛ばしてひどい目にあった。幸い3km地点から日差しが陰り、暑さがこたえなくなったが、勾配は緩まない。

こんな坂道にも所どころにチャペルがあり、村人たちとサイクリストを分け隔てなく見守ってくれている。頂上付近はスキーリゾートで、ゲレンデがダウンヒルのコースになっているため、MTBで上っている人も多い。下りはダートの方がおもしろいのだろう。

タイムトライアルの優勝者はヴァンサンの長男、16歳のレミくんだ。なんと54分で上ってしまい、脚力差を見せつけられた。数々のレースでの優勝歴は伊達ではない。

標高で1100mほど上のゴール地点は、気温36度ある下界の町とは別世界だった。コンドミニアム群の先には緑の牧場が広がり、雪を被った高山が遠くにそびえる。ここでもピクニック。午後は下って宿に入り、半日の休息日。

ホテルは、英語のガイドブックにも掲載されていた自転車びいきの宿、ホテルオーベルランドだ。

1907年に建てられた古い建物だが、表側にはプロチームのジャージや自転車のデコレーションが飾られていて楽しい。まるで博物館のよう。せっかくの休養日なので、町へ繰り出しビールやアイスクリームをいただいた。

Etape5
ツールの熱狂が残る峠

5日目はグランドン峠と、クロワ・ドフェールというどちらもツールでおなじみの峠を目指す。深い谷にうがたれた道を進み最後の民家を過ぎると、峠まではダム湖と牧場が続く。グランドン峠に向かう道以外に何もない。アルプスと日本の山の形の差は、氷河（グレイシャー）に削られたU字谷か、雨水に長い年月に渡って浸食されたV字谷かの違いからくる。

V字谷は険しくとも傾斜が単調なので、上り道も比較的一定のテンポになる。ところがU字谷では、Uの底はなだらかで、牧場が広がるのどかな風景になるが、縦に伸びた両側は一転して切り立っている。アイガー北壁は、ほぼ垂直であり、マッターホルン、ラ・メイジュなどの尖った山も、この手の壁の遺残物だ。

これまで上ってきた、イズラン峠、ガリビエ峠、ラルプ・デュエズもそんな壁に道が刻まれている。グランドン峠の北側も同様に険しい。2週間前のツールの興奮も生々しく、頂上手前の急坂には"FROOME DOG WIGGO"などと、ツールで活躍した多くの有名選手のニックネームや名がペイントされていた。

頂上には巨大な自転車のモニュメントが設置されており、サイクリング気分を盛り上げてくれる。

山々に取り囲まれながらのランチのあと、クロワ・ドフェールまではたったの2・5km。地名の由来となった鉄の十字架、この地のシンボルである〝3本の釘〟を意味する3つの美しく尖ったエギュ・ダルヴなど、絵になる景色に包まれながらビールをいただく。

宿はサン・ソルラン・ダルグのクレルヴィー。おいしい食事が自慢のペンションだ。ツールの4賞ジャージの小旗がテラスを飾っている。デザートは村で作られたトムやカマンベールなどチーズの盛り合わせだ。食後のコーヒーをいただいたあと、「これを飲んでみないか？」と、宿主に注がれたのが手作りのジェネピ。アルプス蓬（よもぎ）を漬けたリキュールだ。このあたりでは強壮剤として親しまれている。強烈、50%を超えるアルコール度数と感じた。

Etape6
肩を寄せ合う

最終日は、モラール峠、昨年道路の補修が終わったショシー峠、そして、超級マドレーヌ峠を越えてアルベールビルに戻る。

出発前に写真を撮っていると、宿主がペンタックスを構えて「みなさんの写真を撮りましょう。私は地元の新聞の仕事もしているんだ」とのことで、ペンションの前でパチリ。8月8日のドーフィネリベレ紙モーリエンヌ版に「日の出る国から、アルプの里へ」として掲載された。

足慣らしに上ったモラールを下るとサン・ジャン・ド・モーリエンヌの町。フランスナイフの老舗、オピネル社創業時の工場跡あり、博物館も併設されていた。クリスチンの出身地で、ショシー峠の中腹の山荘で夏を過ごしている御両親が、ランチをご馳走してくれることになっていた。

だが、手伝いのため先に向かっていたレミくんからお祖父さんの具合が悪いとの電話が入り、医者を呼ぶことになった。我々は残ったお祖母さんを訪ねチキンとポテトのグラタンをいただいた。病院に運ばれたお祖父さんの無事を願いつつ、峠を目指す。そこから先の道は補修されており、細いながらも不安なく下ることができた。

幹線に入る途中の道路脇、ガレージほどある窯に火をくべている老人たちがいた。明日から始まる村祭りに皆で食べるパンを焼く準備だそう。村にひとつの協同パン窯。山の人々が肩を寄せ合い暮らす様をかいま見た。

マドレーヌ峠は、残り14・5km地点からの上りとなった。これを上ればアルベールビルまで下るだけ。何とか上り終えると北側にはまたしてもモンブランが姿を現し、我々の完走を祝ってくれた。

ここでアルベールビルにまっすぐ下らず、ベルナール・イノー氏が経営しているスパで体をほぐし、峠のブラッセリーで最後の夕食を摂ることになった。鴨のローストを中心としたメニューをサヴォワのワインでいただく。1週間の思い出を一人ひとり語り出す。この旅の立役者は、最後までクルマでサポートしてくれたクリスチンとキャシーだ。とくに、クリスチンはお父様が入院し、心配だったろうが、我々を送り届けるまで健気に気を配ってくれた。

丸1週間一緒に旅をして、家族同様になった我々である。感謝の気持ちと、またの再会を願う言葉を交換する。峠道の厳しさ、風物の美しさは、予想以上だった。でも最も心に残ったのは、ヴァンサン一家やアルプスに生きる人の優しさ、逞しさ、そして何よりも互いを思いやり助け合う精神だ。

「ヴァンサン、ジル、そしてみなさん、今度は一緒にイゾアール峠、ボネ峠を越えて地中海へ向けて走りましょう！」と、誓いあって、旅を終えた。

SAINT-SORLIN-D'ARVES

Du pays du soleil levant au cœur des Arves, rencontre avec des vacanciers pas comme les autres

●峠を走りに日本人が来た、と地方紙のドーフィネリベレに紹介された

読者レポート募集中！

自転車に関することならなんでもOK。ツーリングレポートやレース出場記、イベント参加やちょっと変わった自転車散策、自転車に対する熱い思いなど、あなたのサイクルライフを書いて投稿してください。投稿はEメールでも受け付けます。本文は2000～4000字程度にまとめ、自転車歴と簡単な自己紹介文およびそれぞれの写真の解説文を添えてください。

●写真
自己紹介用のスナップ写真1点と、レポートに関連した写真4～8点をお送りください。デジタル写真の場合はワード文書等に貼り付けず、直接CD-ROM等に入れて郵送してください。Eメールの場合は写真1点につき300KB以上の容量で。データが大きすぎて一度に送れない場合は複数回に分けてお送りください。

●応募方法
①住所、②氏名、③生年月日、④年齢、⑤職業、⑥連絡先（電話番号、Eメールアドレス、FAX番号等）、⑦自転車歴、⑧自己紹介を明記のうえ、下記のあて先までご応募ください。選考のうえ、掲載作品を決定します。採用分には規定の薄謝を掲載から約1カ月後に送ります。原則として、原稿と写真は返却しません。なお、編集の都合上、趣旨を損なわない範囲で投稿された原稿の一部を修正したり、割愛させていただく場合があります。あらかじめご了承ください。また、採用した原稿や写真は弊社ホームページに転用したり、電子出版の際に再利用させていただくことがあります。

●あて先
郵送の場合：〒104-8488 八重洲出版 サイクルスポーツ編集部「輪な道」係
Eメールの場合：info@cyclesports.jp（件名に「輪な道への投稿」と明記のこと）

編集部より すてきなバカンスを過ごされましたね!外国人の自転車仲間ができれば、奥深い趣味の世界へ最短距離で行けるはず。ピクニックテーブルのランチスタイル、トレビアン!（松）